パスカルの《アポロジー》のプラン復元に関して（XXVII）

Sur le plan de l'《Apologie》de Pascal (XXVII)

竹　下　春　日

28°《イエス・キリストの証拠》

〔I〕預言とその成就による証明。――（一）イエス・キリストがメシアであることの証拠。――La. 581-Br. 743, La. 582-Br. 638, La. 589-Br. 697, La. 596-Br. 699, La. 529-Br. 782 (254), La. 645-Br. 739 (298), La. 663-Br. 761(316)。これらのうち代表例として，二断章を挙げるならば，次の如くである――《イエス・キリストの証拠。／…神は彼ら〔ユダヤ人たち〕に約束して，たとい私があなたがたをこの世の果てにまで散らしても，もしあなたがたが私の律法に忠実であるならば，あなたがたを再び集めるであろう，と言われた。彼らは律法にははなはだ忠実であるが，やはり圧迫されつづけている。》(La. 582)，《ユダヤ人は，彼のメシアであることを認めまいとして，彼を殺したことにより，彼にメシアの決定的な証拠を与えた。／また彼を否認しつづけることによって，彼らはみずから申し分のない証人となった。／そして，彼を殺し，彼を拒みつづけて，預言を成就させた（『イザヤ書』60章，『詩篇』第71篇）。》(La. 633) 最後に，La. 581 について附言しておく必要が存する。これは，《イエス・キリストの証拠。／なぜ『ルツ』は保存されたか。／なぜタマルの話は。》というもので，タマルおよびルツの存在意義にかんするものであるが，両者は諸注の示すごとく，ダビテの子孫たるイエスキリストが，ユダの子孫から出るという預言を成就させるための，不可欠の人々であるというのが，

パスカルの意図であるとおもわれる。

（二）イエス・キリストの一生にかんする預言とその成就。—（a）来臨当時の世の腐敗した状態（La. 661-Br. 726（314）＝『イザヤ書』49章——51章，『ハガイ書』2章4節）。（b）イエス・キリストがユダ族の出であること（La. 661-Br. 726（314）＝『創世記』49章）。（c）力をもって異教徒を征服しなかったイエス（La. 655-Br. 763(308)）。（d）自分で敵を従わせないイエス（La. 657-fr. 791（310））。（e）イエスの神殿のきよめ（La. 652-Br. 715（305）＝『ハガイ書』2章7節——10節）。（f）イエスの一生とその後の事態（La. 647-Br. 727（300））。

以上のうち特に重要なる意義を有するのは，最後の（f）である——《メシアの在世中に。／<謎>『エゼキエル書』17章。／彼の先駆者，『マラキ書』3章。／彼は幼児として生まれる，『イザヤ書』9章。／彼はベツレヘムの町に生まれる，『ミカ書』5章。彼はおもにエルサレムに現われ，ユダとダビテの氏族から生まれる。／彼は知者と学者とを盲目にする，『イザヤ書』6章，8章，29章など。福音を貧しい者と卑しい者とに伝える，『イザヤ書』29章。盲人の目を開き，病者を健やかにし，暗黒のなかでうめく者を光に導く，『イザヤ書61章。／彼は完全な道を教え，異邦人の師となる，『イザヤ書』55章，42章1節——7節。／預言は不信者には理解されない，『ダニエル書』12章，『ホセア書』14章9節，しかし，よく教えられた者には理解される。／預言はメシアを貧しいものとして現わすとともに，諸国民の主として現わす，『イザヤ書』52章14節など，53章，『ゼカリヤ書』9章9節。／メシア来臨の時期を予告する預言は，彼を異邦人の主，しかも受難者として予告するだけである。雲に乗って来る審判者として予告しない。また彼を審判者，栄光の主として予告する預言は時期を示さない。／彼は世の罪のために犠牲となる，『イザヤ書』39章，53章など。／彼は貴重な礎石となる，『イザヤ書』28章16節。／彼はつまずきと妨げとの石となる，『イザヤ書』8章。／エルサレムはこの石につきあたる。／建築師はこの石を捨て去る，『詩篇』第118篇22節。／神はこの石を隅のかしら石とされる。／またこの石は大きな山となり，大地に満ちる，『ダニエル書』

2章。／かくして，彼は捨てられ，否まれ，裏切られ，『詩篇』第109篇8節。／売られ，『ゼカリヤ書』11章12節，唾せられ，打たれ，あざけられ，あらゆる仕方で苦しめられ，苦みを飲まされ，『詩篇』第69篇，刺され『ゼカリヤ書』12章，両手両足を貫かれ，殺され，その衣服はくじ引きされる，『詩篇』第22篇。／彼はよみがえる，『詩篇』第16篇，三日目に，『ホセア書』6章3節。／神の右に座するため天にのぼる，『詩篇』第110篇。／王たちは彼にさからって武器をとる，『詩篇』第2篇。／彼は父なる神の右にあって，その敵にうち勝つ。／地の王たちと万民とは彼を拝する，『イザヤ書』60章。／ユダヤ人は民族として存続する，『エレミヤ書』。／彼らはさまよう，王なく，云々，『ホセア書』3章，預言者なく，『アモス書』，救いを待ちつつも，それを見出すことがない，『イザヤ書』。／イエス・キリストによって異邦人の召されること，『イザヤ書』52章15節，55章5節，60章など，『詩篇』第72篇。／『ホセア書』1章9節，「あなたがたは散らされてふえ増したのちは，もはや私の民ではなく，私はあなたがたの神ではないであろう。あなたがたは私の民でないと言われた所で，私は彼らを私の民であると言おう。」》(La. 647)。

〔Ⅱ〕イエス・キリスト自身の言行による証明。――（一）神に相応しいイエス・キリストの語り方――《富について語る職人，戦争，王位などについて語る代言人。だが，富者は富についてよく語り，王は与えたばかりの大きな贈物について冷静に語り，そして神〔イエス・キリストと父たる神〕は神について正しく語る。》(La. 580-Br. 799)。

（二）イエス・キリストの明快さと素朴さ――《イエス・キリストの証拠。／イエス・キリストは，大きなことを，あたかもそれを大きいと考えたこともないかのように単純に語られたが，しかしまた自分の考えがすぐ人にわかるように明白に語られた。この素朴とこの明白との結合は，驚嘆すべきものである。》(La. 586-Br. 797)。（三）神とバプテスマのヨハネとの証言――La. 607-Br. 784 (286)。

〔Ⅲ〕メシアの来臨の結果とその徴しとしての，聖らかさ。――《清浄。／「私の霊をそそごう」。すべての民は不信と邪欲とのうちにあった。全地は愛に燃

え，王公はその栄華を捨て，少女らは殉教の死をとげた。このような力はどこから来たか。それはメシアが来臨されたからだ。これこそ彼の来臨の結果としるしなのだ。》(La. 578-772)。

〔IV〕イエス・キリストの弟子たちは，詐欺師ではないということについて。——La. 587-Br. 801, La. 599-Br. 802, La. 513-Br. 572 (238)。

〔V〕神の証人としてのユダヤ人たち。——(一) 証人としてのユダヤ人——La. 583-Br. 763, La. 584-Br. 764〔La. 583 と連関〕, La. 588-Br. 640, La. 591-Br. 639, La. 603-Br. 714 (279), La. 604-Br. 641 (283)。(二) ヘロデについて——La. 612-Br. 179 (291) は，《ヘロデが殺させた二歳以下の幼児》について述べ，ヘロデの残酷さを明らかにしている。ところで，かかるヘロデさえも，La. 628-Br. 753 (27°《預言》の章中に既出) によれば，メシアを信じていたのである。しかしヘロデの信じるメシアとは，他の肉的ユダヤ人と同様，《バルコスバ》〔バルコクバのこと〕のごとき武力によって政治的解放を目指した人物（偽メシア）を，意味していたのである。したがってヘロデを典型とするユダヤ人たちは，真のメシアたるイエス・キリストの来臨を見誤り，彼を殺したのである。パスカルは，この断章において，ヘロデをメシアの逆説的証人の一典型として，読者に提示しようとしたものと，おもわれる。

〔VI〕イエス・キリストが，旧約・新約の《中心》leur centre の位置を占めていること。——La. 576-Br. 742, La. 592-Br. 752, La. 600-Br. 740 (279)。これらのうち，最後のものが重要であるので，引用することにする——《モーセは，まず三位一体，原罪，メシアを教える。／ダビテ，偉大な証人。／王，善良な，あわれみ深い，美しい魂，賢明な精神，有為な人物。彼は預言し，その奇蹟は起こる。それらは無数である。／彼〔ダビテ〕に，もし虚栄心があったなら，自分はメシアであると言いさえすればよかった。彼に関する預言は，イエス・キリストに関するものよりも明白であるから。／聖ヨハネについても同様である。》(La. 592)。この断章の主旨とするところは，メシアを自称すれば，容易にメシアに成れたダビテと聖ヨハネが，敢えてそれをしなかったのは，イエス・キリストが真のメシアであったからであると，いうに存する。ダビテ

は旧約中の，而して聖ヨハネは新約中の人物であるから，パスカルの見地からすれば，イエス・キリストは，新旧両約の《中心》であると，言うことになる。

次に La. 600 は，イエス・キリストの中心的位置について，明白に説いている——《イエス・キリスト，彼を二つの聖書は，旧約はその希望として，新約はその模範として，いずれも中心と見なしている。》

〔Ⅶ〕ヨセフによって象徴されたイエス・キリスト。——《ヨセフによって表徴されたイエス・キリスト。…／牢獄の中で，二人の罪人のあいだにはさまれた罪のないヨセフ，十字架上で，二人の盗賊のあいだに置かれたイエス・キリスト。ヨセフは同じしるしから，一人には救いを，他の一人には死を予告する。イエス・キリストは同じ罪から，選ばれた者には救いを，捨てられた者には刑罰を与える。ヨセフは予告するだけであるが，イエス・キリストは実行する。ヨセフは，救われるべき人に向って，その人が栄位に帰ったら，自分を思い出してくれるようにと願う。イエス・キリストに救われる人は，キリストがその御国に帰られたら，自分を思い出してくださるようにと願う。》(La. 608-Br. 768 (287))。このヨセフの物語は，『創世記』37章以下に出てくるものであるが，これによってパスカルが説かんとしたことは，恐らく次の事である。所謂創世記の時代にあってさえ，神はメシアの象徴を世に送ったのである，即ち神はメシアを世に使わすべき意思を，既に早い時期から，これを預言と共に示していたのだ，と云うことである。

〔Ⅷ〕「カエサルのほか，私たちには王はない。」の言葉による証明。——La. 651-Br. 721 (304)。この断章の意味するところは，《預言》の章に属する La. 631-Br. 720 によって，明らかである。同断章は，次の如くである——《「カエサルのほか，私たちに王はない。」〔『ヨハネ福音書』19章15節〕だから，イエス・キリストはメシアであったのだ。なぜなら，彼らはもはや他国人しか王として戴かず，ほかの王を望んでもいなかったから。》

〔Ⅸ〕聖書の記述の特性による証明。——（一）正典の証人としての異端者について——La. 590-Br. 569)。（二）聖書の外見上の不一致について——La. 595-Br. 755〔24°《表徴としての律法》の章中の〔Ⅱ〕参照〕。（三）記者の叙述

の客観性について——La. 593-Br. 800, La. 428-Br. 798 (207)。これらのうち，最も重要なる La. 428 を掲げると，次の如くである——《福音書の文体は，多くの点において，驚嘆すべきものである。／…もし福音史家たちの控えめが，きわめてすぐれた特質を持つ他の多くの筆致とともに，見せかけであり，しかもたんに注意をひくための見せかけであったとしたら，たとい彼ら自身はあえてそれに気がつかなかったにしても，そういう点を彼らの長所として認めてくれる友を得るには事欠かなかったであろう。だが，彼らはそんな見せかけをせず，全く無私の動機で動いたので，そういう点をだれからも指摘されなかった。そして，私の考えでは，このような事柄の多くは今まで少くも注目されずにきたが，これこそ筆の運び方がいかに冷静であったかを立証するものである。》

〔X〕神の摂理による世界の動向からする証明。——La. 594-Br. 701, La. 606-Br. 700, La. 203-Br. 176 (100)。これら諸断章のうち，La. 594 は極めて明瞭なる一例である——《…ダリウスとクロス，アレクサンドロス，ローマ人，ポンペイウスとヘロデが，福音の栄光のために，そうとは気づかずに働いているのを，信仰の目をもって見るのは，なんとすばらしいことか。》

〔XI〕イエス・キリストにかんする歴史家たちの無記録は，イエスキリストの実在に対する反証とはならないということ。——La. 577-Br. 786, La. 611-Br. 787 (290)。《イエス・キリストの微賤（この世で微賤と呼ぶ意味での）は，国家の重大事しか記録しない歴史家たちがほとんど彼を認めなかったほどのものであった。》(La. 577)，《ヨセフスもタキトウスも，その他の歴史家たちも，イエス・キリストのことを語らなかったことについて。／このことは反証になるどころか，かえって確証になる。それというのは，イエス・キリストが実在したこと，彼の宗教が大評判になったこと，これらの人々がそれについて無知でなかったことは，確実であり，したがって，彼らが故意にそれを隠したか，それとも語ることは語っても，禁止されるか改変されるかしたことは，明白であるから。》(La. 611)。

〔XII〕三つの秩序における偉大なるものの光輝。——La. 575-Br. 283, La. 585-Br. 793, La. 605-Br. 792 (284)。これらのうち代表的なものは，La. 585

である。この断章中で，パスカルは次のごとく説いている――《身体から精神への無限の距離は，精神から愛への無限に無限な距離を表徴する。なぜなら，愛は超自然的であるから。…／神から来るのでなければ無に等しい知恵の偉大は，肉的な人々にも精神的な人々にも見えない．これらは類を異にする三つの秩序である。…／聖徒たちは，彼らの威力，彼らの光輝，彼らの勝利，彼らの光彩を持ち，肉的または精神的偉大を少しも必要としない。…／イエス・キリストは，財産もなく，学問の対外的な業績もなく，その清浄な秩序のなかにおられる。彼は発明も授けず，支配もしなかった。だが，謙虚で忍耐づよく清浄で，神に対しては清く，悪魔に対しては恐るべく，少しの罪もなかった。ああ，知恵を見る心情の目を持つ人々にとって，彼はいかに偉大な壮麗とすばらしい豪華とをもって来臨されたことであろう。》

〔XIII〕マホメットとイエス・キリストの比較。――La. 598-Br. 600, La. 560-Br. 766 (272)〔16°《他宗教の虚偽》の章中における La. 403-Br. 599参照〕。この二断章のうち，われわれは La. 598 によって，マホメットに対するイエス・キリストの優れた点を，端的に知りうる――《マホメットのしたことは，だれにでもできる。彼は奇跡を行なわなかったし，預言もされなかったのだから。だが，イエス・キリストのされたことは，だれにでもできない。》

〔XIV〕奇蹟の組み合わせの非偶然性による証明。――《奇跡の組み合わせ。》(La. 597-Br. 809)。この断章の内容を裏附ける実例を，われわれは 18°《理性の服従と利用》の章に属する La. 365-Br. 838 中に，見出すことができる。同断章は，次の如くである――《イエス・キリストは奇跡を行なわれた。ついで使徒たちも初代の聖徒たちも多数の奇跡を行なった。それは預言がまだ成就せず，彼らによって成就されつつあったので，奇跡のほか証拠になるものがなかったからである。…メシアが死に，復活し，そして諸国民を回心させるまでは，預言はすべて成就したとはいえなかった。そこで，この時間のあいだは奇跡の必要があったのだ。今やユダヤ人に対してその必要はない。成就した預言は一つの永続的な奇跡だからである。》この fr. により，われわれは《成就した預言》les prophéties accomplies が《一つの永続的な奇跡》un miracle

subsistant であること，そしてまたこの奇蹟（跡）の前に，イエス・キリストや使徒たち，聖徒たちが《奇跡》des miracles を行っていたことを，知るのである。この前後二群の奇蹟は，偶然的継起ではありえない。なぜなら，イエス・キリスト，使徒たち，聖徒たちが奇蹟を行なったのは，未だもろもろのメシア来臨の預言が成就していなかった為めであり，預言の実現の未完成が，これ（預言の成就）に先立つ諸奇蹟の存在理由だったからである。即ちここには，預言の成就を目指す目的的必然性と多数の預言内容間の整合性とが存すのであり，これは実に——パスカルの立場から観るとき——神の意思の存在したがって神の存在そのものを，証するものに外ならないのである。こうして前後二群の《奇跡の組み合せ》les combinaisons des miracles の全体が，神の存在の証明を成就するのである。

（XXVII 回了）